

(油川・青森西部)

青森・新田^{にった}(一) 遺跡

- 1 所在地 青森市大字石江字高間
- 2 調査期間 二〇〇六年度調査 二〇〇六年(平18)四月～一月
- 3 発掘機関 青森市教育委員会
- 4 調査担当者 木村淳一
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代、平安時代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

新田(一) 遺跡は、青森市西部の国道七号とJR新青森駅の間

標高五～七m前後の丘陵地及び沖積地上に立地する。東北新幹線新青森駅周辺の土地区画整理事業に伴い、二〇〇三年度から継続して発掘調査を実施しており、四カ年で約一〇八〇〇㎡を調査した。

検出した遺構は、縄文時

代の貯蔵穴、平安時代の竪穴住居・土坑・井戸・溝・ピット、中世の掘立柱建物・井戸などである。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・擦文土器・木製品、中世のかわらけ・陶磁器などが出土している。木簡は、B―四区内の標高七・三mの丘陵上で検出した井戸SE一〇二から一点出土した。この井戸は、平面形が不整形を呈し、長径一・六m短径一・四m深さ三・五mを測る素掘りの井戸である。木簡は、井戸中層の深さ二・六mの地点から土師器片とともに出土した。中層からは、他に木器碗とその未成品、木製仏像の手や水瓶の未成品などが出土している。中層出土の板材三点の年輪年代測定の結果、伐採年は、一〇一七・一〇二一・一〇二二年という数値が得られている。

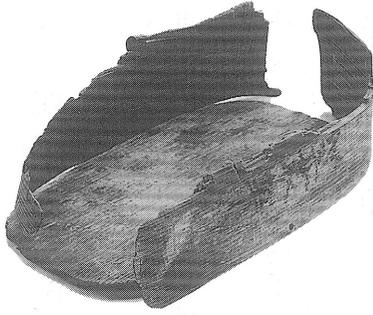
8 木簡の積文・内容

(1) 「笠簀竿□」

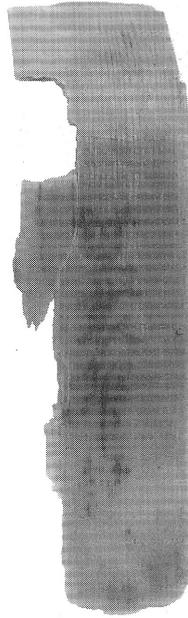
神保162×幅80×厚57 061

長楕円形を呈する曲物で、樹種はヒノキ科アスナロである。文字は側板に横方向に記入されている。四文字目は竹冠の墨痕が観察されるが、下半が摩耗して判読できなかった。竹冠の文字を書き連ねた習書木簡と考えられるが、二文字目は草冠の可能性もある。釈読にあたっては、学習院大学の鐘江宏之氏と奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏のご教示を得た。

(木村淳一)



曲物全体写真



墨書のある側板部分

